

# 東方朔

禪鳳作

前

シテ  
老翁

ツレ  
(男)  
同伴者

後

シテ  
東方朔

ツレ  
西王母

季は  
地は  
初秋  
唐土

ワキサシ

「おもしろや四時移り易くして。春過ぎ夏暮れ今は  
早。初秋の七日七夕の。星の祭を急ぐなり。

ツレ 「帝の御殿は承華殿。

ワキ 「さながら花の袖を連ね。

ツレ 「七宝の台金銀の床に。君を始め奉り。

ワキ 「官軍おのく。

ツレ 「並み居つゝ。

地 「御遊をなしていろいろ。く。楽しみ尽きぬ其

氣色。音に聞く喜見城も。是にはいかで勝るべき。

唯是れ君の御威光。広き恵みは有難や。く。

シテ、ツレ一聲 「治まれる。御代の光りに数ならぬ。身までも安き

住居かな。

ツレ 「恵みも広き此君の。

二人 「御影を頼むばかりなり。

シテサシ 「それ賢王の御代のしるし。五日の風や十日の雨。

二人 「湿ふ四方の草木まで。靡き随ふ此時に。生まれあ

ふ身は頼もしや。

下歌 「時しも今日は七夕の。逢ふ瀬を急ぐ頃なれや。

上歌 「秋来ぬと。目に見ぬ空はおのづから。く。音か

へて吹く風の。袖も涼しき夕暮。靡く稻葉の色  
までも。千年の秋の始めかな。く。

シテ詞 「如何に奏聞申すべき事の候。

ワキヅレ 「奏聞申さんとは如何なる者ぞ。

シテ 「是は此國の傍に住む者にて候ふが。申し上げたき

子細候ひて参内申して候。

ワキヅレ 「さらば此方へ参り候へ。

シテ 「是は此國の傍に住む者にて候ふが。めでたき瑞相  
の御座候ひて参りて候。此程三足の青鳥御殿の上  
を飛び廻り候。是れ西王母が寵愛の鳥にて候。即  
ち西王母此君へ参礼申すべし。此事奏聞申さん為  
めに参りて候。

ワキ 「かゝるめでたき事こそ候はね。猶々仙人の謂懇に

物語り候へ。

地クリ

「それ仙郷といつば。人間に交はらず。松の葉をすき苔を身に着て。年は経れども楽しみ尽きず。飛行自在の通を得る。

シテサシ  
「かたじけなくも悉達太子は。仙人に仕へおはしまし。

地  
「採菓汲水年を経て。終に成道し給ひて。大聖世尊となり給ふ。

クセ  
「然るに仙人の其数。限りも知らぬ中にも。西王母と聞えしは。西方極楽。無量寿仏の化現なれば。

量りなき命の。仙人となるぞめでたき。されば園生に植うる桃の。三千年に一度。花咲き実なる此木の。仙薬となるぞ不思議なる。

シテ  
「今は包まじ我こそは。

地  
「其名も世々に隠れなき。東方朔と聞えしは。此老翁が事なり。君桃実をきこし召さば。御寿命長

遠に。御身も息災なるべし。急ぎ王母を伴なひ。

重ねて参内申さんと。庭上を立つて帰る波の。声ばかり残りつゝ。形は雲に入りにけり。形は雲に入りにけり。形は雲に入りにけり。

入りにけり。 (中入)

後ジテ

「そもそも是は。仙郷に入つて年久しき。東方朔とは我事なり。さても我西王母が桃実を。度々服せし其故に。寿命既に九千歳に及べり。彼桃実を君に捧げ申さんとの誓ひあり。如何にやいかに西王母。とくく参内申すべし。

地「不思議や西の空よりも。く。白雲一村くだると見えしが。三足の青鳥。翅をならべて飛び廻り。姿も妙なる王母の出で立ち。光りもかゝやく衣冠を着し。斑龍に乗じて顕はれ給ふ。まのあたりなる奇特かな。

王母

「王母は庭上に歩み出で。

地「王母は庭上に歩み出で。彼桃実を捧げ持つて。

上覧に供へ奉れば。帝王御感の余りにや。糸竹の調べ数を尽し。皆一同にかなで給ふ。舞楽の秘曲は面白や。　（樂）

地  
「舞楽も漸々時過ぎて。く。夕陽西に傾きければ。各君に御暇申し。帰らんとせしに。帝王名残を惜しみ給ひ。重ねて参内申すべしと。宣旨を蒙り。二人は伴なひ出でけるが。王母は斑龍にゆらりと打ち乗り。遙の雲路に攀ぢ上り。遙の雲路に攀ぢ上つて。又天上にぞ帰りける。